ダン・ナダナーと宮下圭介

石村 実（美術家・批評家）

絵画や彫刻は静止した、動かない芸術表現ですがその表現の中には独自の時間が流れています。近代になってから動画による映像表現や、機械仕掛けの動く彫刻というものも制作されるようになり、いまやコンピューターを駆使して動く疑似自然や仮想の空間を表現することも可能です。しかし基本的にそれらの表現は、絵画や彫刻がもつ特有の時間の表現とは異なるものです。

哲学者のメルロ＝ポンティはその著書『眼と精神』の中で、走る馬の分解写真とロマン派の画家ジェリコーが描いた馬の姿が合致しない、という有名なエピソードを取り上げて、そのことについて彫刻家のロダンが「芸術家こそ真実」だ、と言ったことを紹介しています。これは絵画や彫刻が写真のように一瞬の時間の対象の姿を切り取るものではなく、ある幅をもった時間の中で対象の動きそのものを表現するものだということを示唆しています。

このように絵画や彫刻は対象の表現において独自の時間を含んでいますが、しかしそのこととは別に、それらは作家の制作に関わることにおいても独自の時間を有しています。それは絵画や彫刻が、画家や彫刻家が時間をかけて制作したものを最終的に一つの結果として見る、という鑑賞のあり方から生じたものです。ふつう鑑賞者は作家の制作過程を見ることもなく、完成した作品だけを鑑賞するものです。そして彼らは画家の筆跡や彫刻家の鑿の跡から、その費やされた行為や時間を推し量るのですが、そのとき静止した画像や彫像は、作家がそこに込めた豊かな時間や行為を雄弁にもの語るのです。

さて、ダン・ナダナーと宮下圭介は、それぞれに絵画特有の時間を熟知した表現者です。
ダン・ナダナーは動きのあるモチーフを、絵具の層を重層的に重ねながら表現しています。描かれたモチーフの動きと制作者の手の動きが重なって見えて、それが絵画ならではの独特の時間性を生んでいるのです。ダン・ナダナーはそのことを「水の中で泳ぐ人の行動に非常に似ている」と言っています。水の中で泳ぐ人は水の動きを感じ取りながら自らも動き続けるのですが、それが彼の絵画、そして制作行為とよく似ているということなのです。ダン・ナダナーはビデオ動画も制作していますが、画像の重ね方、時間の移り変わりが、彼の制作する絵画と本質的には同じものです。ダン・ナダナーが表現しようとしている時間は、彼が肌で感じた時間であって、例えば頭の中で作り上げた物語のように秩序のある流麗な時間の流れとは対極にあるものです。

一方の宮下圭介は、制作行為を絵具の層の中に織り込んでいき、それを重ね合わせることで作家の行為や時間が透けて見えるような、独自の絵画を創作し続けています。ひとつひとつの絵具の層の行為は単純であっても、それが重ね合わせられることで豊かで複雑な時間が感受できるのです。逆に言えば、各層の行為がシンプルであればこそ、私たちはその重層性を見て取れるのです。とくに宮下の線描の層は、少ない手数の中で視線を誘導する重要な働きを含んでいて、その動きは考えつくされたものです。

このように、絵画特有の豊かな時間性を、それぞれ独自の方法論で表現した二人の作家の作品が一つの空間で並べられたとき、その空間にはどのような時間が流れるのでしょうか。モチーフの動きから制作者の行為まで、それぞれの作品が持つ特異な時間性の差異が見えてきて、そのことが相乗効果を生み出すのではないか、と期待されます。それはダン・ナダナーと宮下圭介という個々の作家が抱えてきた課題であると同時に、「絵画の時間性」と「絵画の重層性」という現代絵画が向き合うべき大きな課題が、その相乗効果によって新たな形で見えてくるはずなのです。それは彼らが真摯に絵画という表現と対峙してきた証でもあり、結局そういう作家の営みだけが芸術に新たな方向性を示唆することができるのです。